

外務省での勤務を通じて

平成30年8月
外交実務研修員 菅家 郷史
(福島県より派遣)

1. はじめに

平成29年4月に外務省へ派遣されてからもうすぐ1年5か月が過ぎようとしています。私は福島県から出向しており、アジア大洋州局大洋州課で勤務しています。今回はこの場をお借りして、大洋州課での勤務など、これまで外務省で経験してきたことを記したいと思います。

2. 大洋州課での勤務

大洋州課は、オーストラリア、ニュージーランド及び14の太平洋島嶼国(キリバス共和国、クック諸島、サモア独立国、ソロモン諸島、ツバル、トンガ王国、ナウル共和国、ニウエ、バヌアツ共和国、パプアニューギニア独立国、パラオ共和国、フィジー共和国、マーシャル諸島共和国、ミクロネシア連邦)を所管しています。

私は、大洋州課の中でも太平洋島嶼国を担当する島嶼国班に所属しており、クック諸島、トンガ、ニウエ、フィジーを主に担当してきました。太平洋島嶼国の中には、恥ずかしながら初めて聞く国もあり、配属されてからしばらく国の名前や国旗を覚えるのに時間がかかりました。

普段は、国担当として現地の日本大使館や在京大使館等とやり取りをしていますが、こうした通常業務に加えて、各国の首脳等の往来がある際には、担当や班を超えて全課体制で対応する場合があります。首脳の訪日に限って例を挙げると、平成29年度は5月にニュージーランドの首相が、10月にミクロネシアの大統領が、1月にオーストラリアの首相がそれぞれ訪日しました。ニュージーランド首相の訪日の際には首相一行の北海道訪問に同行したほか、ミクロネシア大統領の訪日の際にはリエゾン業務を担当しました。リエゾンは大統領の動きを常に把握する必要があるため、本邦到着時から離日まで全ての日程に同行するとともに同じ宿舎に宿泊しました。また、安倍総理との会談に加えて天皇陛下が皇居御所で大統領と会見する機会もあり、少し遠目ながら天皇陛下を直接拝見するなど、リエゾン業務を通じて貴重な経験をすることができました。こうした往来は、閣僚級の訪日や日本政府要人の往訪を含めると通年で多くの件数があり、大型の、あるいは複数の案件が重なった際には多忙な日々を送ることになります。



日・ミクロネシア首脳会談の様子

また、これまでにオーストラリア、ニュージーランド、クック諸島、トンガ、ナウル及びフィジーに出張する機会がありました。太平洋島嶼国は、訪問前にイメージしていた通りおおらかで明るい人が多く、全体的にのんびりとした印象を受けました。その一方で、地域として「国土が狭く分散」しており、「国際市場から遠く」、「自然災害や気候変動等の環境変化に弱い」とった共通の課題を抱えるとともに、それぞれが独自の課題を抱えていることを実際に訪問して実感しました。



ナウル独立50周年記念式典の様子

クックで飲んだココナツジュース

3. 第8回太平洋・島サミット(PALM8)

日本は、上記でも述べたような太平洋島嶼国が直面する様々な問題について率直な意見交換を行い、緊密な協力関係を構築するための首脳会議として、1997年から3年ごとに「太平洋・島サミット(PALM)」を開催しています。今年の5月18日及び19日には、福島県いわき市において「第8回太平洋・島サミット(PALM8)」が開催され、日本、太平洋島嶼国、ニュージーランド、豪州に加え、新規参加のニューカレドニア・仏領ポリネシアの2地域を含む19か国・地域の首脳等が参加しました。



私の出身地である福島県で開催されたPALM8に担当課として携われたことは、とても貴重な経験となりました。また、いわき市での開催は2015年の第7回に引き続いての開催であり、参加した首脳の方々に3年前よりもさらに進んだ福島県の復興や魅力を発信することができたことは、一福島県職員としても嬉しく思いました。

昨年の今頃は、主にロゴマークの作成や福島県やいわき市との連絡・調整役を担当していました。11月になると省内に「第8回太平洋・島サミット準備事務局」が設置され、少しずつ人員が増強され本番に向けた準備が加速化していき、4月になると執務室を国際会議室に移し、省内各課や在外公館から応援出張者が集まり、最終的には100名を超える体制となりました。

本番直前には「バイ会談・行事サブ班」に所属し、主に担当国との首脳会談に関連する業務に携わりました。直前1か月程度は深夜も土日も関係なく作業に追われ忙しい毎

日を過ごし、直面する苦労も多くありましたが、いざ本番が終わった時の達成感は何ものにも代えがたいものでした。全ての行事が終わった後、いわき市の会場の窓から外の景色を眺め、「ああ、やっと終わった。」と、喜びもありましたが何よりホッとしたことを今でもよく覚えています。



PALM8のロゴマーク



PALM8での集合写真

4. おわりに

私は、これまでの県職員生活の中で国際業務に携わった経験がなく、国際情勢についてもテレビや新聞を横目に自分とは縁遠い話だなあと感じていたため、外務省派遣の話を受けたときは少なからず驚きました。

外務省に来てから初めの数か月は、仕事の進め方を含め環境がガラッと変わったこともあり、戸惑いの連続でしたが、周りの同僚や先輩、上司の温かなサポート・指導を頂きながら何とか日々の業務をこなしてきました。

外務省が、地方を外交推進のための重要なパートナーとして位置づけているように、地方も外交の重要なプレーヤーです。それと同時に、地方の活性化のためには地方自らが積極的に世界へ飛び出していくことが今後ますます重要になってくると思います。そのような中で、外務省での勤務は大変貴重なものであり、4年という研修期間の中で少しでも多くのことを学び、経験したことを福島県に戻ってからしっかりと還元したいと思います。

最後になりますが、研修の機会を与えて頂いた外務省及び福島県に感謝を述べて報告を締めたいと思います。ありがとうございました。